

1 患 者 情 報

(1) 平成 23 年のトピックス

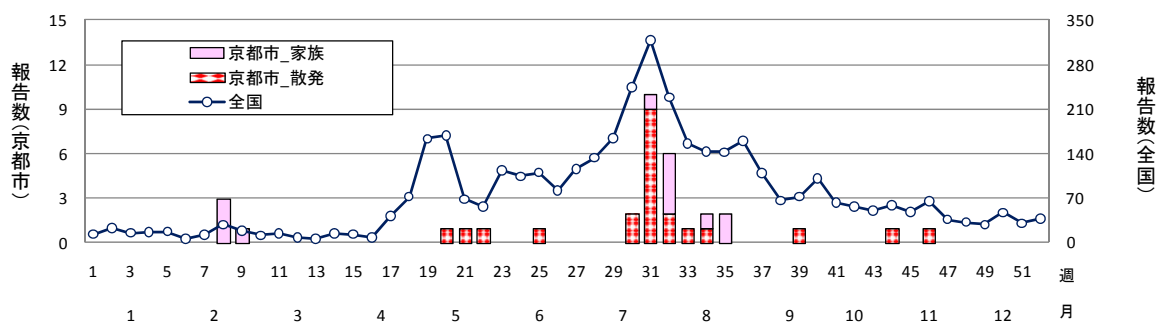
ア 平成 23 年 腸管出血性大腸菌感染症のまとめ

平成 23 年の年間報告数は 34 例で、平成 11 年 4 月以降では平成 11 年（26 例）、平成 12 年（33 例）に次いで少なく、平成 22 年と同じであった。型別は O157 が 30 例（88.2%）、O86、O111、O145、不明が各 1 例で、推定感染地域はすべて国内であった。HUS（溶血性尿毒症症候群）症例の届出 2 例、家族内発生は 4 事例（感染者 12 名）であった。年齢階級別では例年に比べて 60 歳以上が 11 例（60 歳代 4 例、70 歳代 3 例、80 歳代 4 例）と多かった。

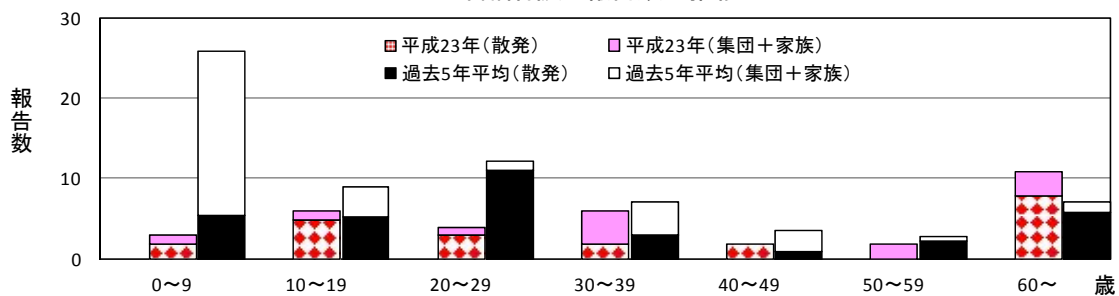
診断年別型別詳細

診断年	合計	O26	O86	O91	O103	O111	O121	O145	O157	その他
平成 11 年 4 月以降	26								25	O1 が 1 例
平成 12 年	33	8							25	
平成 13 年	52	8				1			43	
平成 14 年	35				1				32	O165, O 型不明が各 1 例
平成 15 年	101	5							96	
平成 16 年	48	2					4		42	
平成 17 年	36	5		1					30	
平成 18 年	57	2					1		54	
平成 19 年	54	2				3			49	
平成 20 年	86	34			5	2		3	41	HUS 発症で型別不明が 1 例
平成 21 年	93	8		1		3	1	1	79	
平成 22 年	34	1			1	2			30	
平成 23 年	34		1			1		1	30	HUS 発症で型別不明が 1 例

本市及び全国の報告数の推移（平成 23 年）



年齢階級別報告数の推移



イ 平成23年 インフルエンザのまとめ

(ア) インフルエンザの報告数

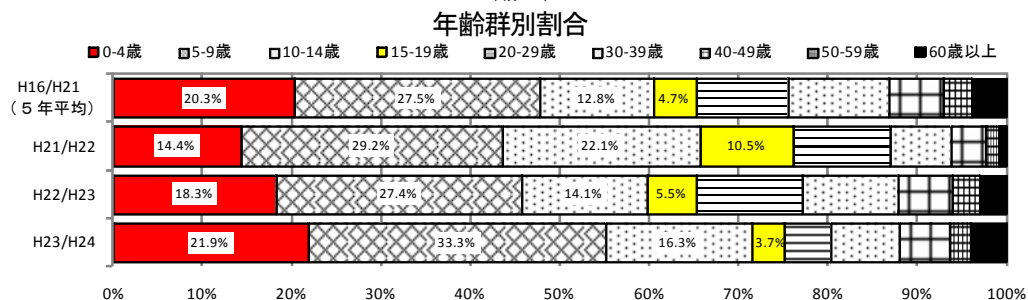
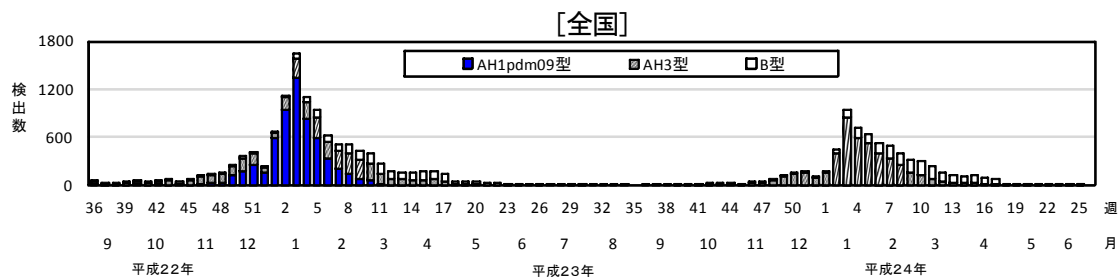
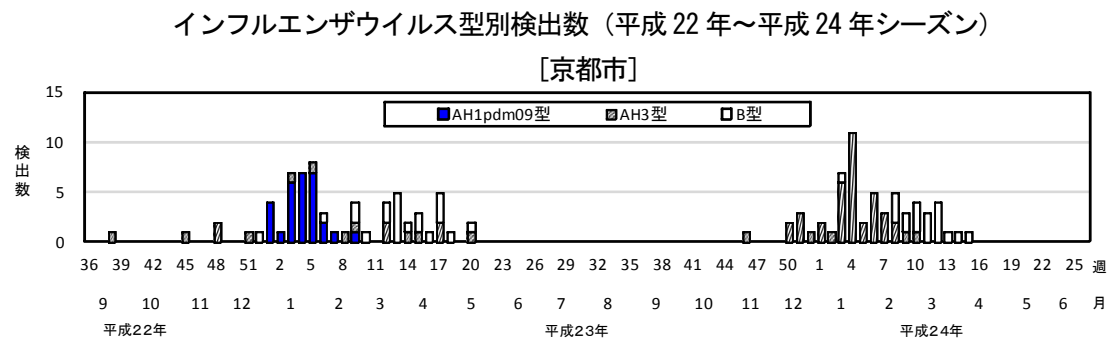
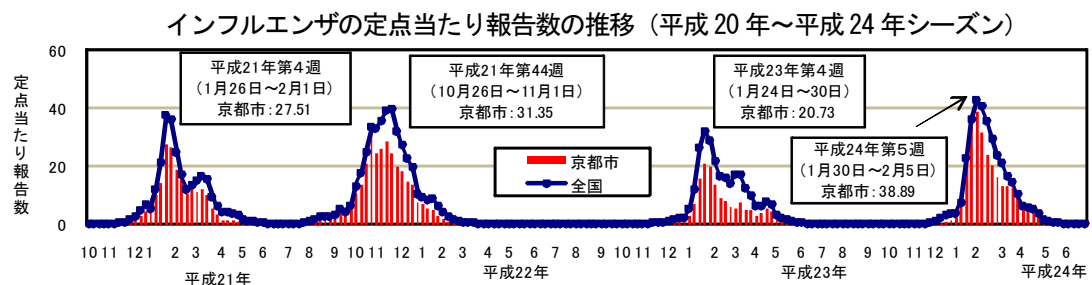
平成22年～平成23年シーズンのインフルエンザの定点当たり報告数は、平成23年第4週（1月24日～1月30日）に流行のピークを迎えた後減少したが、3月～4月の7週間にわたって「5」前後で推移した。平成23年～平成24年シーズンは、平成24年第5週（1月30日～2月5日）にピークとなった。

(イ) インフルエンザウイルスの型別

平成22年～平成23年シーズンに分離、検出されたインフルエンザウイルスの型は、ピークの第4週前後はAH1pdm09が主であったが、その後減少し3月以降はAH3型及びB型のみとなった。平成23年～平成24年シーズンはAH3型が主流で、B型も検出されている。

(ウ) 年齢群別

年齢群別割合は、新型インフルエンザが発生した平成21年～平成22年シーズンには、10歳代の割合が増加し、5～9歳、10～14歳、0～4歳の順となったが、平成22年～23年及び平成23年～平成24年シーズンは、従来どおり、5～9歳、0～4歳、10～14歳の順であった。



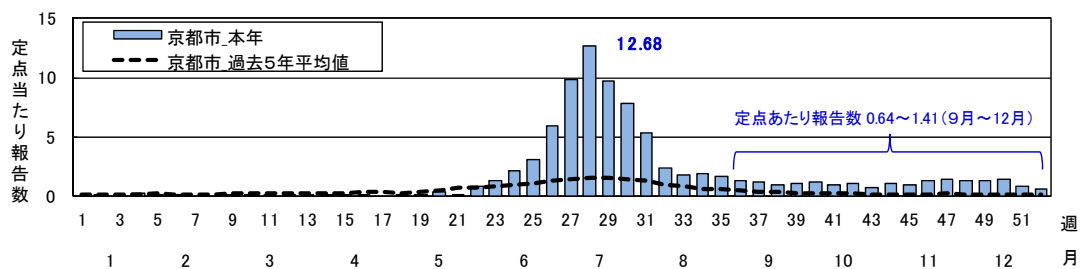
ウ 平成 23 年 手足口病のまとめ

平成 23 年の定点当たり報告数は、第 23 週（5 月 30 日～6 月 5 日）以降過去 5 年平均値を上回る状態が続いた。第 28 週（7 月 11 日～7 月 17 日）には 12.68 となり、昭和 57 年に感染症発生動向調査が開始されて以降最も多くなった。その後減少したが、例年は報告数の少ない 9 月以降も定点当たり報告数は 0.64～1.41 で、同時期の過去 5 年平均値（0.13～0.52）を大きく上回り、報告数の少ない年のピーク時に相当する値が続いた。

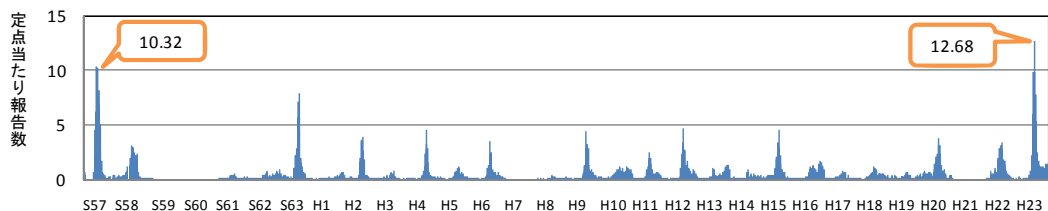
平成 23 年に病原体定点医療機関から搬入された手足口病の検体から検出されたウイルスは 7 月のピーク付近まではコクサッキーウイルス A6 型（CA6）が、10 月からは例年であればほとんど報告されないコクサッキーウイルス A16 型（CA16）のみで、平成 22 年に多数検出されたエンテロウイルス 71 型（EV71）は、検出されなかった。

平成 23 年の手足口病の臨床像は従来と異なり、発症初期に高熱を発する率が高く、皮疹は四肢末端に限局せずに広範囲に認められ、水疱が大きい印象があるという報告があった。（国立感染症研究所感染症情報センター感染症週報（IDWR）2011 年第 26 週より）

京都市の定点当たり報告数の推移（平成 23 年）



昭和 57 年以降の京都市の定点当たり報告数の推移

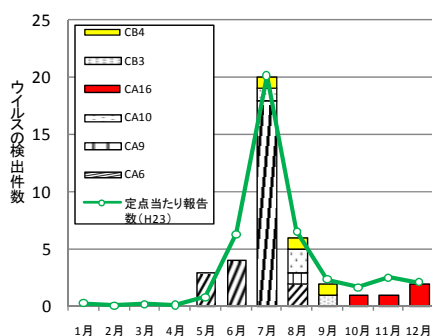


過去 10 年間の（平成 13 年～平成 23 年）の年次別累積報告数

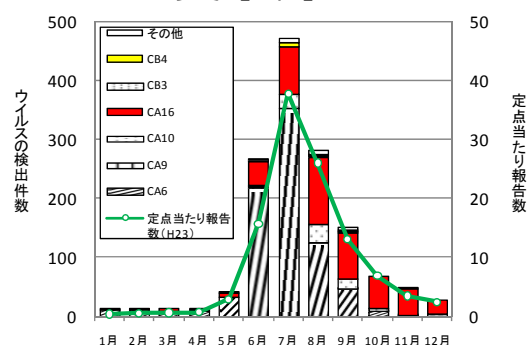
	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
累積報告数	831	500	1,423	1,223	438	709	512	1,729	513	1,618	3,469
ピーク時 定点あたり報告数	1.07	0.88	4.54	1.24	0.80	1.17	0.61	3.80	1.22	3.32	12.68

手足口病から検出されたコクサッキーウイルス及び定点当たり報告数の月別推移

【京都市】



参考【全国】



手足口病から検出されたウイルスの年次推移

	EV71	CA6	CA10	CA16	CB4	その他	合計
平成 12 年	3					2	5
平成 13 年	1					1	2
平成 14 年				6			6
平成 15 年	1	1				1	3
平成 16 年							0
平成 17 年							0
平成 18 年						1	1
平成 19 年							0
平成 20 年				1		1	2
平成 21 年		1	1				2
平成 22 年	8	2				2	12
平成 23 年		27	3	5	3	6	44
合 計	13	31	4	12	3	14	77

EV71:エンテロウイルス 71

CA6:コクサッキーウイルス A6

CA10:コクサッキーウイルス A10

CA16:コクサッキーウイルス A16

CB4: コクサッキーウイルス B4

エ 平成 23 年 伝染性紅斑と流行性耳下腺炎のまとめ

伝染性紅斑と流行性耳下腺炎は 4～5 年周期で流行を繰り返している。

伝染性紅斑は平成 22 年から報告数が増加し始め、平成 23 年第 25 週（6 月 20 日～6 月 26 日）にピークを迎え、その後減少した。

流行性耳下腺炎は平成 22 年第 29 週（7 月 19 日～7 月 25 日）にピークを迎え平成 23 年 1 月まで報告数の多い状態が続き、その後ほぼ終息した。

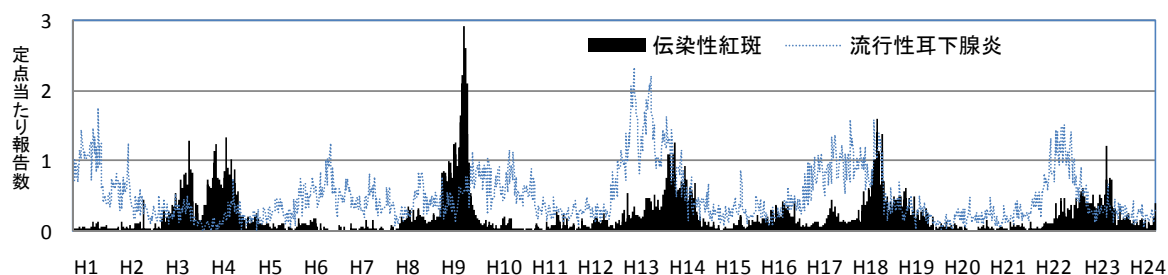
（ア）伝染性紅斑

平成 23 年の定点当たり年間累積報告数は 17.19 で、平成 18 年（27.41）、平成 14 年（19.07）、平成 13 年（18.17）に次いで多かった。

（イ）流行性耳下腺炎

定点当たり年間累積報告数は平成 22 年は 44.86 で、平成 13 年（74.61）、平成 17 年（47.12）に次いで多かったが平成 23 年は 15.38 であった。

京都市の定点当たり報告数の推移（平成 1 年～平成 24 年 6 月）



オ 平成23年 マイコプラズマ肺炎のまとめ

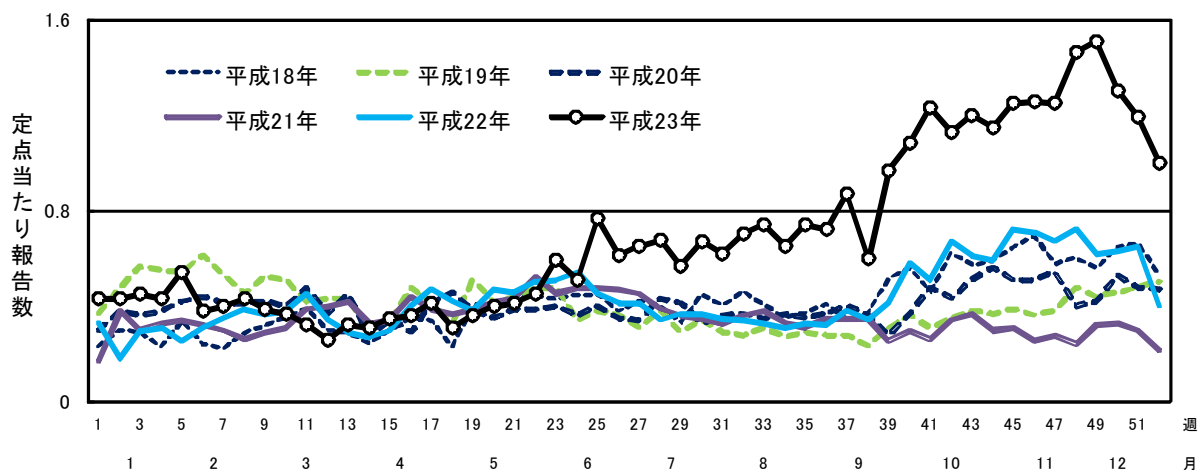
平成23年は京都市の基幹定点から5月、10月、11月に各1例報告があり定点当たり年間累積報告数は3.00であった。全国では6月から定点当たり報告数が例年を上回った。第49週（12月5日～12月11日）にピークとなり、大きな流行となった。

全国の年齢群別では4歳以下が34.9%、5歳～9歳が30.9%、10歳～14歳が15.9%で、14歳以下が81.8%を占めた。

京都市及び全国の定点当たり年間累積報告数の年次推移

	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
京都市	6.00	11.00	9.00	5.00	2.00	11.00	4.00	2.00	－	－	3.00
全国	9.07	9.05	12.08	12.66	15.03	21.90	20.79	21.03	18.24	22.56	34.04

全国のマイコプラズマ肺炎の定点当たり報告数の推移



全国のマイコプラズマ肺炎の年齢群別割合

